

## 「教育実習」を核とした日韓交流プログラムの発展

— 2008年度 愛知教育大学 - 晋州教育大学校の学生相互訪問を中心に —

江 島 徹 郎 (愛知教育大学 情報教育講座)  
山 根 真 理 (愛知教育大学 家政教育講座)  
上 田 崇 仁 (愛知教育大学 日本語教育講座)  
梅 田 恭 子 (愛知教育大学 情報教育講座)

### A Practical Report on Korea-Japan Student Exchange Program focusing on Teaching Practice

: The Case of 2008's Program between Chinju National University of Education and Aichi University of Education

Tetsuro EJIMA (Department of Information Sciences, Aichi University of Education)  
Mari YAMANE (Department of Home Economics Education, Aichi University of Education)  
Takahito UEDA (Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education)  
Kyoko UMEDA (Department of Information Sciences, Aichi University of Education)

**要約** 韓国の晋州教育大学校と日本の愛知教育大学で学生相互訪問研修プログラムを行った。学生は、それぞれ相手の小学校での授業参加あるいは「教育実習」を行った。これらは2004年度から継続して行っている。またそれぞれの学生は、相互に協力してひとつの授業を創り上げてきた。この協力関係の形成は、それぞれの大学の留学生や留学経験者、以前の相互訪問研修プログラムへの参加者などが積極的に参加したことによるところが大きい。ただし研修の総合的な目的である国際理解という点では、日本側の教材が互いの国の文化的と考えられる内容に偏るなど、問題点がある。また、韓国側の「教育実習」において、教育プログラムを「実習」に収斂するように構成できなかったという問題点がある。今後はこれらの解決を目指す。

**Keywords** : Korea-Japan Student Exchange Program, Teaching Practice, International Understanding  
日韓交流プログラム, 教育実習, 国際理解

#### 1. はじめに

本稿は、韓国の晋州教育大学校と日本の愛知教育大学が、2008年度に行った学生相互訪問研修プログラムのうち、小学校での「教育実習」について報告する。

グローバル化がすすむ現在、国際理解教育あるいは国際的視野をもつ教員養成は、重要な課題である。本稿では、外国の小学校で、韓日の学生が協力関係をもって、自文化・社会を紹介する「教育実習」活動の実践について報告し、これの実践を相互に行う意味について、考察する。<sup>1</sup>

なお、ここで言う「教育実習」は、正規の大学のカリキュラムとしての教育実習を指すのではない。少なくとも現時点では、学生相互訪問研修プログラムの一環として、学生が相互に相手国の学校で授業を行うものを「教育実習」と呼称しているのである。

#### 2. 経緯とプログラムの目的・方法

晋州教育大と愛知教育大は、1997年に交流協定を結んで以来、交換留学生の相互派遣、晋州教育大から愛知教育大への在外研究教員の派遣、愛知教育大の授業「日本と韓国・朝鮮・コリア」(1998~2005年)お

び「コリアンの過去と現在」(2007年度~)への晋州教育大の教員・学生の参加、国際シンポジウム開催、学生の相互訪問研修プログラムなど、多様な形で継続的に教育・研究交流を行ってきた。

なかでも、2004年から実施してきた学生相互訪問研修プログラム(以下プログラム)は、教育大学の特徴を生かしたものである(山根ら 2008)。

プログラムには、以下の2つの目的がある。<sup>2</sup>

- (1) 教育大学で教員をめざす韓日の学生が、相互に交流を深めながら、互いの社会・文化を理解すること。
- (2) 両大学の学生が、それぞれの国で一緒に小学校の教壇に立ち、子どもたちとともに行う実践を企画・実施することを通して、異なる社会における子どもも理解、教育理解を深めること。

また、プログラムの方法は、以下のとおりである。相手の大学に訪問を行う大学は、まず研修団に参加を希望する学生を募集し、組織する。その後、実際の訪問の準備を学生主体で行う。

また、訪問を受ける大学でも、学生たちを組織し、相手の研修団とやり取りしながら準備する。

その上で、実際に相手の大学などを訪問し、小学校での実践「教育実習」などをお互いに協力して行う。

それぞれ帰国後、研修報告会などを行う。

このプログラムの実行にあたり、教員が留意したことのうち大きな点は以下のとおり。

- (1) 基本的に参加する学生が中心になって準備などを行うよう促す。また教員は大きな方向付けやマネジメントなどを中心に行う。
- (2) お互いの学生をなるべく早い段階で組織するようにし、学生同士の連絡がスムーズになるようにする。
- (3) 上記の学生たちに、お互いの留学生や留学経験者、以前のプログラムへの参加者に積極的に参加してもらえるよう促す。
- (4) 相互のコミュニケーションを円滑に行うために、e-Learningシステムなど用意する。

### 3. 2008年度海外短期研修の概要

2008年度の海外短期研修は、2005年度以降と同様、晋州教育大の研修団の来日は5月、愛知教育大の研修団の訪韓は9月に実施した。この日程は、概ね互いの大学祭の期間に重なっている。この期間は授業がないため、訪問を受ける大学が受け入れのためのプログラムを柔軟に組み易いからである。

2008年5月に、晋州教育大の教員2名と学生13名が来日し、愛知教育大での大学祭への参加、C小学校での「教育実習」などを行った。

2008年9月に、愛知教育大の教員3名と学生13名が訪韓し、晋州教育大での大学祭への参加、A初等学校での「教育実習」などを行った。

### 4. 晋州教育大の研修訪問団

#### 4.1. 晋州教育大のC小学校での実践

次に、2008年5月に行った研修プログラムについて、特に日本の小学校での授業参加を中心にまとめる。

晋州教育大でプログラムを担当する教員のひとりである姜は、2008年度学生交流の目的を「教育交流活動を通して、未来の教師としての共感体形成とともに、国際的感覚をもつ有能な教員としての資質を育て、文化交流活動を通して人間と世界に対する理解と感性をもつ教養人の資質を育てること」としている（李ら2008）。

晋州教育大の教員2名と学生13名は、以下のような日程で来日した。

5月15日(木)	来日・愛知教育大学長 表敬訪問
5月16日(金)	日本のC小学校での授業参加 日本の校長先生の教育に関する講演を聞く

5月17日(土)	愛知教育大内見学 大学祭において模擬店に参加 大学祭のステージで歌う ホームステイ
5月18日(日)	学生交流
5月19日(月)～20日(火)	京都での見学旅行
5月21日(水)	帰国

晋州教育大の学生は2年生から4年生で、それぞれの専攻から1名を選出した。うち4名が簡単な会話で日本語を使うことができた。昨年以前に研修プログラムに参加した学生はいなかった。これはなるべく多くの学生に参加させるために、晋州教育大では再度の参加を認めていないからである。

しかし、多くの学生は、前回愛知教育大の学生が晋州教育大を訪問した際に対応した者であった。

授業参加は、2007年度と同じC小学校で行った。C小学校は外国人児童生徒が多く、「愛知県のグローバルゼーションを体現した学校」（山根ら2007）である。晋州教育大の学生たちはグループに分かれ、5年生と6年生のクラスで1時間、授業参加を行った。

C小学校では、この研修プログラムを、国際理解教育の一環と位置づけ、事前に5年生と6年生の子どもたちが韓国についての調べ学習を行った。そしていくつかの質問事項をまとめた。

子どもたちからの質問を以下に挙げる。

表1 小学生からの質問事項

#### 【5年生より】

- ◎ 私たちは、9月から世界の食べ物について学習します。そこで、韓国の食べ物について教えてください。
  - (1) からい料理は多いですか。
  - (2) 日本にないフルーツはありますか。
  - (3) おすすめ料理の作り方を教えてください。
  - (4) 韓国のりをよく食べますか。
  - (5) 日本の食べ物を食べますか。
  - (6) おすしを食べますか。
- ◎ 他の質問にも教えてください。
  - (7) 韓国の学校について教えてください。
  - (8) テコンドゥは、人気がありますか。

#### 【6年生より】

- ◎ 以下の質問に教えてください。
  - (1) どんなスポーツがありますか。
  - (2) どんな祭りがありますか。
  - (3) 大仏はありますか。
  - (4) 特徴のある建物はありますか。

愛知教育大では、これを日本語のまま、晋州教育大に送った。

そこで、学生たちはこの質問に答えることを中心に授業を構成した。質問への答え方や内容については、日韓の学生同士がメールでやり取りをした。

このやり取りには、晋州教育大からの留学生や愛知教育大から晋州教育大への留学経験者、また以前の相互訪問研修プログラムへの参加者などが参加した。彼らの多くは相互に面識があるので、自発的にやり取りを行い、教員が特に指示をすることはなかった。

5月16日(金)、晋州教育大の学生13名と愛知教育大の学生6名がC小学校を訪問した。愛知教育大の学生は、参加を希望する者はもっと多かったのだが、当日の移動手段などの問題で、6名に限定した(晋州教育大学からの留学生も含まれる)。これら愛知教育大の学生は、通訳を含め、サポートを行った。

10:20	学校到着
10:30~	打ち合わせ
10:50~11:35 (3限)	運動会の練習
11:45~12:30 (4限)	授業参加(5・6年生)
12:30~13:15	各クラスにて給食参加
13:50~14:35 (5限)	和太鼓など

当日は、まず校長室で挨拶やガイダンスを受けた後、3時間目に運動会の練習に参加した。器械体操の練習であった。韓国ではあまり複雑な器械体操はやらないので、学生たちは驚いたようであった(李ら 2008)。

次に、4時間目に晋州教育大学の学生が実際に5年1組と2組、6年1組と2組を対象に「教育実習」を行った。

5年生は1組と2組が合同で、6年生は1組と2組がそれぞれ別々に、全体で3つのグループに分かれた。5年生には晋州教育大学の学生7名と愛知教育大の留学経験者2名が担当した。また6年1組は晋州教育大の学生3名と留学生1名が、6年2組は晋州教育大の学生3名と留学経験者1名が担当した。

授業は、5年生が基本的に日本語で、6年生は日本語をを使いつつも、留学生等が韓国語を日本語に通訳しながら行った。

授業の内容は、基本的には質問に順番に答えていくものであった。5年生は、質問を書いたフリップを提示して、その答えをイラストなどで掲示するなどして説明していった。6年生も同様だが、掲示の代わりにプロジェクタで動画などを映し出すなどした(図1)。

またスポーツについての質問が5年生にも6年生にもあり、晋州教育大の学生1名が、順番に教室を回って、すべての組でテコンドーの演技を実際にやってみせた(図2)。



図1 晋州教育大の学生の「教育実習」



図2 テコンドーの演技をする晋州教育大の学生

その後、各教室で子どもと学生と一緒に給食を食べた。5年生を担当した学生も2つのグループに分かれ、5年1組と2組にそれぞれ入った。

最後に、子どもたちが学生に和太鼓を披露した。学生は韓国の伝統的な笛(テグムとタンソ)を披露した。

#### 4.2. 晋州教育大「教育実習」の効果と検討

李ら(2008)は、研修プログラムの効果として、5つを挙げているが、なかでも「教育実習」については、次のように述べている。

小学校見学と授業体験を通して、日本の授業の現状における諸場面を、両国の未来の教師たちの討論をもとにして、各国の長所・短所に対する分析が可能であった。

筆者らは、特に事前の準備において「未来の教師たちの討議」が行われたことを意義深いと考える。またこれらは、教員がマネジメントをした部分を離れて、もっぱら学生たちの自発的な取り組みとして行われたことは、さらに意義深い。

しかしその一方で、学生のやり取りの仔細を教員が



十分に把握することができなかった。

そのため、プログラムのマネジメントが円滑にすすまない面もあった。そこで、9月における愛知教育大学の学生の訪韓に向けて、そのやり取りの把握についての改善を試みることにした。

研修プログラムの「教育」に直接かかわる部分について、その後晋州教育大の担当教員から伺った指摘は、重要である。研修終了後、訪日研修に参加した学生から、今後は小学校での「実習」を中心に組み立てたほうがよいのでは、という意見がだされた、とのことであった。確かに、日本の小学校の教育課程にあわせる形で研修プログラムを組んでいるので、韓国の学生からすると、学校でのプログラムがやや拡散的になり、小学校「教育実習」活動を中心として日本の子ども理解、教育理解をすすめるという点では、改善が必要な面もあったと思われる。

## 5. 愛知教育大の研修訪問団の訪韓

### 5.1. 晋州教育大への研修訪問団の準備

愛知教育大の研修訪問団の結成にあたり、6月25日(水)から7月4日(金)まで、掲示などを用いて参加者を公募した。公募にさきだって、共通科目「コリアンの過去と現在」の授業のなかで、海外研修のことも含む、協定校との交流について情報提供を行った。面接などを経て13名のメンバーを確定した。

メンバーの学年は2年生から4年生までであった。課程・系・専攻などは偏りがあり、日本語教育コース(3名)、社会科(初等1名, 中等2名)など、複数の学生が参加している専攻があった。全体として、人文・社会科学専攻の学生が多い傾向にあった。韓国語で簡単な会話ができる学生は1名であった。また昨年度までの研修プログラムに参加した学生3名が再度参加した。うち1名が研修団のリーダーになった。

第1回の勉強会を7月23日(水)に行った。こののみ、教員が日時と場所を指定した。以後の勉強会は学生たちが自主的に行った。全体のものでも6回行なわれ、有志の学生たちはさらに別の機会を持ったようである。

これらの様子は、“Kakitsubata”と呼ぶe-Learningシステムを用いて共有化された。ただし、“Kakitsubata”はそのままでは携帯電話に対応していない。2007年度の本研究や、5月の晋州教育大からの訪問団とのやり取りで、このことが問題だと考えられたので、今回は携帯電話に対応した特別な“Kakitsubata”を用意した。

今回は韓国ではA初等学校での「教育実習」が決まっていた。愛知教育大の学生は、4つのグループに分かれて授業の準備をした。それぞれA～Dと呼ぶ。

Aグループのみ、昨年の研修への参加者がいない。

それぞれのグループは、まず、受け入れ小学校であるA初等学校の子どもたちから事前に質問を受けるか否かを相談した。しかし、A初等学校が夏休み中であり、質問が訪問の直前になってしまうことなどを考慮し、事前の質問はなしとした。

次に、各グループは、それぞれの授業のテーマを考えた。以下のとおりである。

- A. 水引・熨斗袋から贈り物をする際の心遣いを学ぶ
- B. 茶道を通してもてなしの心を
- C. 日本の文化(扇子作り, 投扇興)
- D. 七夕まつりを通じて知る願掛けの文化

また、それぞれのグループが「授業の目標」として挙げたものから抜粋する。

- A. ① 日本と韓国に共通する時節・冠婚葬祭の贈答の儀礼について学び、両者の違いに注目し尊重する視点を養うとともに、今後自国(韓国)の文化についてもより深く理解させる
- ② 贈り物をする際には、常に相手のことを第一に考え、細やかな心配りができるような心がける意識を持たせる
- ③ 将来日本人と関係を持ったときに役立つ教養を身につけさせる

- B. (1) 茶道を体験し、「もてなしの心」を知ることを通して、相手を思いやり、行動することができるようになる。
- (2) 日本やその他の国々について興味をもち、それらの国について、知ろうとし積極的にわかかりをもつようになる。

- C. • 扇子作りに積極的に取り組み、仲間や日本人と楽しみながら投扇興で遊ぶことができる。(態度)
- 扇子が日本の文化であることを理解し、その扇子を用いて日本人と交流することを通して、日本を肌で感じ、日本を始めとする外国に対して興味を持ち、目を向け、考えることができる。(思考・判断)

- D. ① 日本にも韓国にも七夕という神話があるが、習慣や意識が異なることに気づかせる。
- ② 目標、夢を文字に起すことによって自分の今からすべきことを自分なりに考えさせる。

学生たちは、それぞれの授業の教材研究を行い、指導案を作成した。

学生たちは、韓国で授業を行うということを、当然ながら強く意識したようだ。また昨年も参加した学生から、昨年の様子などを聞き、教材の選択の参考にしたようだ。

筆者らは、教材の選択に、以下のような特徴があったと考えた。

- (1) 昨年との共通点として、学生が「日本の文化」に注目し、4グループのうち2グループが「韓国の文化との共通点と相違点」に目を向けることを目標に組みこんでいる。
- (2) 昨年と異なるのは、「日本の文化」そのものを知ることに加え、「日本の文化」を通して、「他者への配慮」「もてなしの心」「目標をもつ」など、徳目的な事柄を目標として掲げていることである。
- (3) 「日本やその他の国々」「日本を始めとする外国」という表現にみられるように、日本を外国の一つとして位置づけ、外国への興味・関心をもつことを目標にあげるグループがあった。
- (4) 単に「日本の文化を紹介し、韓日の差異と共通性を知る」のではなく、子どもたちに何を伝えるかが問題である、との自覚は、昨年参加した学生を中心にもっており、テーマの設定に工夫がみられた。
- (5) 昨年参加した学生からの話を聞き、学生たちはノンバーバルなコミュニケーションを中心とした授業を構成するように工夫した。すべてのグループで、子どもたちが物づくりやゲームに参加する展開が用意された。

指導案は、“Kakitsubata”にアップロードされ、筆者らが助言などを行った。

韓国での「教育実習」については、9月5日(金)から、愛知教育大の各チームに1名ずつ、晋州教育大の担当の学生がついた。それぞれの学生たちは電子メールなどでやり取りを繰り返した。この学生は前回に研修団に参加した学生などであり、やはり愛知教育大の学生と面識があった。訪韓する研修団の準備においても、教員が強く指示することなく、学生同士でやり取りが行われた。

学生相互および学生と教員間の情報共有を目指して、携帯電話に対応した“Kakitsubata”は、あまりうまく機能しなかった。原因はいろいろと考えられるが、学生の一人は、携帯電話への対応が不十分で、すべての機能が使えないため、結局メーリングリストなどを使ったと述べた。これは昨年度と比べても、あまり改善できなかったと言える。この点はさらに検討を要する。

## 5.2. 韓国での「教育実習」活動

2008年の研修団は、以下のようなスケジュールで活動した。

9月9日(火)	訪韓 晋州城見学 晋州教育大総長表敬訪問
9月10日(水)	松廣寺, 樂安邑城見学 夜 大学祭参加(ステージ)
9月11日(木)	A 初等学校見学 晋州樹木園で学生交流
9月12日(金)	A 初等学校での「教育実習」 給食体験 釜山へ移動 教育実習の反省会 釜山フィールドワーク
9月13日(土)	釜山フィールドワーク 帰国

プログラム全体として、韓国社会・文化を知る活動と、教育実習を中心とする教育交流のバランスがとれたプログラムになった。なお、昨年まであったホームステイは、秋夕<sup>3</sup>の関係で今回はなしとなった。

## 5.3. 「教育実習」プログラムの概要

### (1) 学生同士の打ち合わせ

晋州教育大の学生と愛知教育大の学生の相互の打ち合わせ時間をプログラムのなかに入れこむことはしなかった。ハードスケジュールのなかではあったが、一日のプログラムが終了した夜や自由な時間を利用して、両大学の学生同士で打ち合わせ、練習の場を設定していた(図3)。



図3 両大学の学生同士で授業を創る

両国学生のチーム編成は、以下のとおりである。

5年1組	A. 水引	日本学生3名	韓国学生2名
5年2組	B. 茶	日本学生4名	韓国学生2名
5年3組	C. 扇	日本学生3名	韓国学生3名, 日本留学生1名
5年4組	D. 七夕	日本学生3名	韓国学生4名

## (2) 事前見学

11日(木)午前、A初等学校の見学および担任の先生との打ち合わせを行った。見学の時間には、まず2時限目に学校全体の参観をし、続く3時限目に「教育実習」を行う予定のクラスに入って授業の見学をした。その上で、授業終了後20分程度時間をとって、担任の先生と授業についての事前打ち合わせを行うことができた。実習前の見学と打ち合わせを、とても効果的に行うことができたと考える。

## (3) 「教育実習」

12日(金)朝9時30分に学校に入り、11時まで、用意いただいた部屋で、授業の準備を行った。その後、3時限目(11時10分～11時50分)に、各クラスに入って授業を実施した。授業は基本的には韓国語で行い、やや複雑な言い回しについては韓国の学生のサポートを得ていた。韓国語の発音が通じにくい時にも、韓国の学生が適宜言い直すなどして、コミュニケーションを助けていた。韓国語の学習経験がなかった学生が多い中で、「授業で使う言葉をとにかく憶えて、状況の中で使用する」というやり方であったが、「授業をする」という目的が明確であるだけに、「伝える言語」になっていたことは、特筆すべきだと思われる。

授業はおおむね予定通り展開され、学生たちが計画した活動に、晋州の小学生たちは興味深そうに取り組んでいた(図4)。



図4 韓国での「教育実習」

## (4) 反省会

12日(金)午後、釜山に到着後、ホテルで「教育実習」の反省会を行った。各クラスで授業を行った両国の学生のグループごとに、各クラスで行ったことと、それに対する反省などを報告しあった。

反省会では、グループ単位での振り返りを行った後に、全体に向けて口頭発表の形式で行った。自分たちの授業に対する子どもたちの反応に感動を受けた様子が見て取れた。韓国の学生とのコミュニケーションをとりながら、チームで教えることの困難さにも気づいた発言もみられた。また、授業に先立ち、韓国の学生が子どもたちに対してリラックスできるような話をしたグループがあり、非常に円滑な授業運びができたとの感想もみられた。一方で、言葉が通じない相手に対する準備にどのような配慮が必要かということ、実感をもって感じたという発言もあった。こうした発言に対し、引率教員からは、子どもたちの身近にあるものを利用することで、学習項目と日常生活を別のものであると感じさせることのない自然な流れに気を使っ

てはどうか、というコメント、絵での説明や、話での説明で終わることなく、やって見せる必要性、やらせてみる必要性についてもコメントがあった。これらのコメントは、ますます多様化していく教育現場に立とうとする学生たちにとって、一定の示唆を与えるものとなったと思われる。

## 5.4. フィールドワークについて

今年度の訪問日程は、秋夕と最終日が重なるということになった。この期間、韓国では帰省ラッシュが発生し、また、多くの店が閉店する状態となっている。最終日の釜山でのフィールドワークは、この状態の街で行われた。

事前には、グループごとのフィールドワークを想定していた。しかし、韓国の学生の参加者数と、多くの店が休んでいるという事態を考え、同一行動をとるという形に変更した。事前に予定していた地域も、同一行動をとる形で訪れた街も、店はすべて閉まっているという事態を学生たちは体験的に学ぶことができた。これは、今日の日本のお盆との対比という意味で非常に興味深い経験となったと思われる。学生たちのフィールドワークは、韓国の日常と非日常とともに体験できたということで、大きな成果が得られたと考えられる。

## 5.5. 愛知教育大「教育実習」の検討

愛知教育大の「教育実習」について、研修の目的との関連で、若干の考察を行う。

まず、学生が相互の交流を深めながら、互いの社会・文化理解をすすめることについては、晋州教育大の訪日研修と同様、かなりの成功をおさめたと言えるように思われる。研修前、研修中の準備も含め、両大



学の学生たちは、自発的に非常に熱心にコミュニケーションをとり、「海外で、ゲスト側の学生とホスト側の学生が協力して『授業』をつくる」という活動を行うことができた。今年度、晋州教育大の学生は、必ずしも高度な日本語能力をもつ学生ばかりではなかったが、愛知教育大の学生の「授業」の意図をよく理解し、「一緒に『授業』をつくるパートナー」になっていたと感じられた。学生同士の交流の深まりもさることながら、晋州教大とA初等学校による「教育実習」を中核にすえたプログラムの設計によって、可能になった部分も大きいと考えられる。

「教育実習」を通じた、異なる社会の子ども・教育理解という点についてはどうか。これは研修報告会など、学生からの発信を待って考察すべき問題であるが、ここではまず、「授業のテーマと目標」に即して、昨年度との比較において考えられる点を述べる。

山根ら（2008）は、2007年度の研修プログラムにおいて、学生たちが「韓国学生の『授業参加』」の内容にはグローバリゼーション過程も含め、現代社会の多様な現実への視点があるが、日本の学生の「教育実習」の内容は『文化』を核にして構成されており、過去から連続した『文化』の違いと共通性に目が向くがゆえに、現代日本社会あるいは韓国社会のなかの多様性には光があたりにくい傾向がみられた」と指摘している。今年度の「教育実習」においても、学生が「日本の文化」に注目する傾向はある。「韓国の文化との共通点と相違点」については、4グループのうち2グループで目標に設定されている。

昨年度と異なるのは、「生徒に何を伝えるか」を明瞭に意識した目標設定がなされていることと、日本を「さまざま外国」の一つとして位置づける視点がだされていることである。このような観点がでてきたのは、昨年度の研修経験者が3名含まれており、また日本での教育実習を経験した学生も多しだけに、「子どもに何を伝えるか、子どもが何を理解するか」を意識して目標設定を行ったためだと考えられる。

しかしその一方で、昨年同様、一元的に「日本文化」を提示する傾向や、「生徒に伝える内容」が一般的・抽象的な徳育に集中する傾向がみられ、「現代日本社会の多様な現実のなかの一つ」として、具体的な日本社会・文化の現実を提示する視点はみられなかった。この点では、韓国研修団による「授業」が、昨年同様、子どもの疑問に答える形で構成されているために、韓国社会の具体的な生活の現実から出発して構成されていることと対照的である。

## 6. 2つの研修の検討と課題

### 6.1. 検討：「良きライバル」として

晋州教育大から愛知教育大への研修団ならびに愛知教育大から晋州教育大学への研修団について、併せて検討する。

すでに述べてきたとおり、いずれの大学でも、それぞれ方法の違いはあれ、以前に経験をした学生が研修の前から当時まで、多くの面で参加している。また相互の留学生や、あるいは留学経験者も参加している。その結果、彼ら・彼女たちの経験が初めて参加する学生たちにも共有されるようになってきていると考えられる。

筆者らは、学生に晋州教育大から愛知教育大への研修ならびに愛知教育大から晋州教育大学への研修の双方になるべく参加するよう勧めた。その結果、それぞれ相手の学生のやっていることがわかるようになり、自然と学生たちがひとつ前以上の結果を求めるようになった。さらに、協力して研修プログラムを計画・運営するところまで発展した。言わば「良きライバル」として機能している。

### 6.2. 課題

2008年度の、両大学間の海外研修プログラムは、学生同士の交流の深まりによって、相互に協力して授業を創る関係に発展してきた、とみることができよう。これは、事前の準備段階で、電子メールなどの手段を使って、あまり高いコストをかけずにコミュニケーションをとることが可能であったことによるところも大きい。

しかし同時に、課題もまた見えてきたように感じる。

2007年の訪韓研修の課題として、相手の国と自国との文化の「違い」や「同じところ」に学生の注意が集まってしまい、真に国際理解と呼ぶには至らない点があることが考察された（山根ら 2007）。これを改善するために、筆者らはこれまでの研修を経験した学生の役割に期待した。また双方の訪問のどちらも学生に経験させることを重視した。「教育実習」の円滑な運営、協力関係の形成、「子どもに何を伝えるか」を重視した授業の構想、などの点では、一定の成果はあったと考えられる。

しかしその一方で、学生たちの視点だけから発想すると、国と文化が一体化し、「社会のなかの多様性」に向かない。また単なる2つの文化の「同じところ」「違うところ」探し、すなわち「文化の差異と共通性」への注目に陥りがちである。かと思うと、より普遍的・一般的で、自国内でも設定できる徳育的目標に移行してしまう。すなわち、「一国のなかで生きている人々はしばしば単一の存在としてみられがちだが、国籍、地域、年齢、職業など、さまざまな背景をもつ多様な人々だ」という当たり前の事実から出発して授業を構想する、という発想を、学生たちは持ちにくい

ようなのである。これにどう取り組むかが、愛知教育大の「韓国研修」の、大きな課題の1つである。

いっぽう韓国研修団の「教育実習」の場合、日本の小学生の質問に答える形で授業を構成するという形をとっているためか、一元的な「韓国文化」の提示にはなっていない。しかし、教育にかかわるプログラム全体を「教育実習」を中心に構成することができていなかったため、「実習」も含め、教育プログラムがやや散漫になったという課題を残した。この点を改善することが、晋州教育大の「日本研修」の課題であり、愛知教育大はホスト側として、受け入れ先小学校との調整も含め、取り組むべきことだと思われる。

また、すでに述べてきたように、学生たちが中心となる交流を目指した結果、実際の学生たちのやり取りを教員が把握し切れず、マネジメントが困難になった局面もあった。教員サイドのマネジメントと学生の自主性、自律性の最適バランスについて、検討する必要がある。

さらにこの研修プログラムを経た学生たちが、それぞれどのような教員になっていった（あるいはならなかった）のか、そこにこの研修がどのような効果を与えたのかについて、継続的で普遍的な評価を得られるようにしていく必要もあろう。

また山根ら(2008)が指摘しているとおり、この研修プログラムが、当の子どもたちにもたらす「国際的認識」について、議論も評価もできていない。これらは本来、一体となって考えられるべきものであり、検討課題である。

## 7. おわりに

本プログラムはもちろん、晋州教育大とそこに関係する多くの方々のこれまでの活動によって成立している。そして愛知教育大でも、多くの方々がこのプログラムを支えてきた。

このことに対して、深く深くお礼を申し上げたい。

## 注

- 1 本研究は、2007年度～2010年度 文部科学省研究費補助金・基盤研究(C) (課題番号 19530803, 研究代表者・江島徹郎) の援助を受けている。
- 2 このプログラムについて、李は「2つの交流協定大学の特徴を活かし、両国の教育環境、特に多文化環境で生きていかなければならない未来の教師たちの交流であるという点を重視し、また二国国民の文化的背景と日常生活における価値観を体験して理解することに焦点を置いている。」と述べており、プログラムの目的は両大学で共有されている(李ら 2008)。(翻訳は山根による)
- 3 韓国の「お盆」にあたる行事である。

## 文献

### 【日本語】

- 愛知教育大学・晋州教育大学校 交流担当, 2004『韓国と日本: ふたつの文化が会うとき』
- 鈴木眞雄・佐藤洋一編, 1999『1998年度 愛知教育大学 教養科目「日本と韓国・朝鮮・コリア」講義報告書』愛知教育大学「日本と韓国・朝鮮・コリア」講義担当グループ
- 鈴木眞雄・佐藤洋一編, 2000『1999年度 愛知教育大学 教養科目「日本と韓国・朝鮮・コリア」講義報告書』愛知教育大学「日本と韓国・朝鮮・コリア」講義担当教官グループ
- 鈴木眞雄編, 2004『「日本教育文化通信使」事業実施報告書』日本教育文化通信使派遣団
- 鈴木眞雄・山根真理(代表), 2006『愛知教育大学 2004～5年度プロジェクト経費報告書 日韓教育文化通信使「愛知教育大学 国際交流協定校との連携による教員養成大学学生の平和交流プログラム」プロジェクト
- 知立市立知立東小学校 宮地秀明 2006『一人一人が輝き、地域とともに生きる東っ子 — 学校・地域の特色を生かした多文化共生教育』
- 山根真理・江島徹郎・梅田恭子・孔泳泰・姜洪在, 2008「教育実習」を核とした日韓交流プログラムの開発と実践 — 2007年度 愛知教育大学 - 晋州教育大学の学生相互訪問を中心に —, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要第11号, 47-53

### 【韓国語】

- 李 榮晩編, 2005『일본 아이씨 교육대학 방문 보고서 (日本愛知教育大学訪問報告書)』진주교육대학교 일본 자매대학 방문단 (晋州教育大学校 日本姉妹大学訪問団)
- 李 榮晩・姜 洪在編, 2008『일본 아이씨 교육대학 방문 보고서 (日本愛知教育大学訪問報告書)』진주교육대학교 일본 자매대학 방문단 (晋州教育大学校 日本姉妹大学訪問団)

### 【欧語】

- EJIMA, T., UMEDA, K., 2008, Practical Research of Teaching Practice by Japanese University Students in Korea to Foster International Perspective in Teachers, Society for Information Technology & Teacher Education, The Second International Symposium on Educational Cooperation for “Industrial Technology Education”, Kariya, JAPAN.